

會學濟經學大國帝都京

經濟論叢

號五第 卷四十五第

月五年七十和昭

論叢

鎖國以後に於ける南方への關心……………經濟學博士 本庄榮治郎

佛印に於ける信用對策に就いて……………經濟學博士 松岡孝兒

新經濟論理……………經濟學博士 柴田敬

經濟生活の發達と經濟政策……………經濟學士 堀江保藏

研究

テュルゴの社會進歩の理論……………經濟學士 出口勇藏

ジュースミルヒの人口學觀……………經濟學士 青盛和雄

北支農業と灌漑……………經濟學士 山崎武雄

說苑

統制經濟と保險……………經濟學博士 小島昌太郎

稅制改革後の租稅統計……………經濟學博士 汐見三郎

附錄

彙報

研 究

テュルゴの社會進歩の理論

出口 勇 藏

テュルゴに於ける「進歩の理念」は主體と客體、「天才」と「環境」との相互限定のうちに成り立つ。わたくしは先にその主體の側の分析を加へておいた。ここにはその客體の側について若干の考察をこころみて先の研究を補充しつつ、かれの歴史哲學のこの指導理念を全體として理解するに資したのである。先に述べられたやうに、「風吹く海の水のやうに、擾亂の中に恒に同一であり、恒にその完成へと進みゆく」人類の自然的進歩は、天才の力に由るものであるけれども、この天才の力が人類の進歩に貢獻しうるのは一に係つて「環境の偶然」に依存してゐる。環境は、精神に限定を加へて進歩をうながしたり固定せしめたり衰頹に赴かしめたりすることによつて、それ自らも進歩・固定・衰頹の道を進るのである。しからば精神に限定を加へるものとして考へられる限りの環境とは一般にいかなる構造を持つのであらうか。また精神と環境との相互限定によつて人類が進歩すると云はれる場合には、その進歩は具體的にはどの生活分野から生ずるものであらうか。ここに社會進歩に關するテュルゴの思想を追及して見る必要が生ずるであらう。

人間は本來ほほ平等に生れついてゐる。テュルゴによれば「頭腦の筋の偶然な組合せ、感覺器官や記憶力に於ける強さと微妙さの大小、或程度の血液の速さ、おそらく之が自然が人間共に與へた唯々一つの差異である。魂には現實的な不平等がある、けれどもそれは我々に永久に知られはしないだらうしまた決して我々の推理の對象

とはなりえないものであらう。その他の一切は教育の結果である。」⁹⁾ ほぼ平等に生れついでゐる人間はこの教育の結果によつて、すなはち環境の偶然のために、様々な能力を有ち種々な生活をするやうになるのである。さて環境は一般的に云つて先づ自然的環境と社會的環境とに分けることができる。テュルゴが自然的環境の人間精神に對する大いなる影響を承認しながらも、尙且つ社會的環境に優位を置いたことは、風土決定論に對する既に引用した彼の批判から十分に理解せられるであらう。すなはち環境に於ける「道德的」社會的原因がテュルゴの環境論の最も重要な要素である。次に環境は空間的環境と時間的環境とに分けることができる。歴史哲學は環境を取り扱ふ場合には主として時間的環境をば問題とすることは勿論である。しかしそのために、往々にして、空間的環境が看過せられると云ふ抽象に陥りがちであると云ふことは事實である。けれどもテュルゴは彼の進歩主義的世界史觀に於いてこの空間的環境を見落しはしなかつた。彼は世界史に於ける各時代の「横断面」としての「政治的世界圖」(La mappe-monde politique) 名づけられる空間的擴がりに絶えず注意し、それを世界史の「断面圖」と呼び、このもの研究に「政治地理學」の名稱を與へたのであつた。しかし差當り我々はこの空間的環境の内容に立入ることを避けよう。さうしてここでは専ら時間的環境について、テュルゴの合理的精神と實證的精神とによつて濾化された社會進歩の理論を探ねようと思ふ。

二

歴史の進歩は主體的には天才の理性と情熱とにもとづいてゐる。しかし客體的にはそれは何に基くのであるか。それは總括的に云へば「政治組織」である。しかしまたその政治組織が歴史の進歩を導くのはそもそも何に據つてであるか。テュルゴのこの問に對する解答を前以つて一言で云へば、それは經濟に結びついた技術とキリ

スト教によつて獲得された人間性の眞の自覺とである、と云ふことがわかつて来る。いまこの解答の内容を彼の世界史の展開から次に擧げようと思ふ。

テュルゴは社會のはじまりを、アダム・スミスが行つたのと等しく、狩獵民の状態 (État des chasseurs) 遊牧生活 (La vie des pasteurs) 耕作者の状態 (État des laboureurs) として規定する。第一の状態はアメリカの蠻人に於いて見られるところの「めいめいが營養を攝るためには廣大な地域が必要であるので、家族または少數者から成る民族が相互に非常にへだたつて」生存する状態である。第二の状態はベルーで見られるものであるが、ここでは第一の状態よりも人口と富とが多く「所有の精神」が現れはじめ。また「野心」や「貪慾」は人々を掠奪に赴かせる。この時以來民族間の鬭争は避けられぬものとなり、支配者と奴隸が発生した。第三に豊沃な土地に住む民族は間もなく農耕生活を始める。「耕作者は本來征服者ではない。土地の勞働が彼を煩はすことが多いのである。しかし他の民族よりも富裕なので、彼等は暴力に抗して自衛しなくてはならなかつた。のみならず土地と云ふものはその耕作に必要であるよりも遙かに多くの人間をそこで養ふものである。ここから閑暇ある人々が生じ、ここから都市、商業、一切の有用な技術や單純な藝術が生まれ、また萬般のことは精神の一般的進歩に従ふものだから、あらゆる種類の非常に急激なる進歩が発生する。」かくしてこの第三の段階に於いて、都市は商業の求心力のために社會の中心となるに至るのである。

我々はここで技術とはそもそもいかなるものなのか、それと商業や都市との結びつきがいかにして進歩をもたらすのかを検討しておく必要があるであらう。テュルゴは次のやうに技術の本質を規定してゐる。「技術とは自然の利用 (l'usage de la nature) に他ならない。さうして技術の實行はだんだん自然のヴェールを取つてゆく物理學

1) cit. op. p. 278.
2) cit. op. p. 282.

的實驗 (Les expériences physiques) の一つの結果である。」さうして「技術と云ふものは、時が経過するだけのために、科學や趣味の追求そのものに於いて生活の慾望がそれを保存するがために、そこでまた、技術を相繼いで修業する多くの職人の中では、金が鑛山の土と混つてゐるやうに他の人間と混つてゐるところの天才に遭遇しないと云ふことはありえないのであるからして、完成されてゆく。」³⁾ しかしながら技術の進歩はこの「發明の才幹」が物理學的實驗の結果として生ぜしめるだけでは十分ではない。技術が都市の市民社會的環境と結びつくことが重要なのである。技術は都市を中心とする商業と結びつくことによつて「取引の對象」となり、「商業精神」(esprit du commerce) の支配の下に置かれる。ところでこの商業精神こそは次のやうな注目すべき事態をば社會に發生せしめるものである。「都市には商業精神が支配するから平等精神がなくならない。結合した人間の勤勉は……都市の中に商業精神を支配せしめずにはおかない。ところで商業精神があるところには必ず法の力以外は一切の力から獨立した財産の所有 (une propriété des biens indépendante de toute autre force que celle des lois) があるのである。」⁵⁾ すなはち商業精神は人間の内に平等精神を生み自由を確立し法治的社會をもたらす。かかる精神の支配する環境と結びつくことによつて、技術は一度び發明されると單に維持せられるのみならず、更に社會の内に見出されざるをえない發明の才幹によつて一層の進歩を遂げるに相違ないのである。——この敘述から、テュルゴの社會進歩の理論に於いては、自然科學の一つの結果である技術が、都市の商業精神と結びつきその支配の下に置かれることによつて、社會進歩の一つの重要な契機となると考へられてゐることが了解せられるのであらう。この商業精神と結びついた技術はおのづと進歩しゆかざるを得ない。それは言はば自然性を確保してゐるのである。中世のヨーロッパを支配した無智の中にも技術が不斷に進歩したとテュルゴが云つてゐるも、正に技術

3) cit. op. p. 231.

4) ibid.

5) cit. op. p. 287.

の進歩のこの自然性のゆゑに他ならない。さうしてここに我々は彼の進歩思想が自然主義的歴史觀として明確に特徴づけられるものであることを見いだすことができるのである。

テュルゴは、上の引用に述べられてゐたやうに、商業精神のあるところには必ず法治社會があると云ふ。しかしこの社會はいかにして生じその本質は何であるのか。我々は次にこのことの究明に取りかからねばならない。そのために先づ一般に政治權力あるひは國家の發生と本質とに關する彼の理論に耳を藉さうと思ふ。

耕作者は遊牧民ほど好戰的ではないとは云へ、彼等の情熱と野心とは近隣の征服に驅り立てる。國家は征服によつて生ずるのである。かくてここに政治組織の發生を見るのである。テュルゴは、政治權力の發生の論理的根據に關して次のやうに云ふ。

「自然は凡ての人間に幸福にくらす權利を賦與した。必要・欲望・情熱・これらの原理と様々な仕方ではされる理性、これらは自然が幸福なくらしをするために人間に與へたところの力である。しかし眼界あまりに狭く、下卑なことにあまり氣遣ひをし、個人的な幸福を追求して、互に殆ど恒に敵對し合つてゐるために、人間は全體の幸福を目論見つつその目的へと指導し、異つた利益を調停しうるところの、一つの優越的な權力 (une puissance supérieure) を必要とした。」⁶⁾

政治的權力が人間社會に必要であるのは、地上にあまねく存在して生物を育生したり通商を可能ならしめたりする水のためには水蒸氣を集め水降を指導するところの山が必要であるのと一般である。従つて政治的社會の完成は「法の明敏と衡平」(La sagesse et l'équité des lois) および「法を支へる權威」(l'autorité qui les appuie) の二點を廻つて起るのである。法と權威——ここに政治の基礎とその完成とがある。「我々はここにテュルゴの原子論的個人主義を、またホッブスを想はずやうな絶対王制の基礎づけの萌芽を、見るであらう。彼の原子論的個人主義は、先に引いたやうに、法が基くべき正義とは「非常に開明された自己に對する愛にすぎない」ものと規定し、⁸⁾

6) cit. op. pp. 205, 206.

7) ibid.

8) 前掲拙稿參照。

正義が眞實には個人と個人とを結ぶ客觀精神自體の呼び聲としてののみありうるのであり、個人の正義心がこの呼び聲に對する應答として規定されてはゐないことによつても窺はれるけれども、今やそれが一層明瞭になつたであらう。また彼の絶對王制論についてはのちに論ずるところがあるであらう。

さて政治組織の進歩は、上述によつて明かなやうに、法と權威の歴史を辿ることによつて跡づけられる。征服によつて生じた國家は内外の軋轢のために政治を交代させる。さうしてそれによつて人間に理性を漸次に自覺めさせ、政治は漸次合理化されてゆく。けれども古代ギリシヤの政治に至つても、法は「人間の法」であつた。「立法者の作品」と考へられてゐた。ところで法が立法者の作品と考へられてゐる間は、法から人間の「根本悪」を芟除することはできぬ。なぜならそこでは必然的に「自愛心」が「公衆の幸福に對する愛」の内に混同されることになるからである。また立法者が「自愛心」を全然捨てたと云つても、それは「多數者」なる個人よりも一層貪慾であり無良心であるものに追隨することを意味するにすぎなかつた。更に古代に於いては祖國愛は「同市民に對する愛」であるよりはむしろ「外國人に對する共同の敵意」であつたから、立法者の祖國愛は「人類の利益」を忘れることになつてしまつた。先稿にも述べたかかゝる理由に基いて、法と權威の進歩のためには、新しい「一つの原理」が必要であつた。この原理がキリスト教に他ならぬのである。「キリスト教のみが人類の權利を照して見せた。ひとは遂に人間や社會の結合の眞の原理を認識した。ひとは自分が關與してゐる社會に對する偏愛と人類に對する普遍的な愛とを提携させることを知つた」「キリスト教は人間に人類と正義との息を吹きこんだ」とテュルゴは書いてゐる。かくしてキリスト教が信奉せられるところでは、法は人類性を獲得した。さうして政治權力に關して云へば、一般に、主權者と臣下との間の關係は次ぎのやうなものになつたのである。

「王の訴へと人民の訴へ」とを裁くところの最高の裁判を王達に示すことによつて、キリスト教は王達に對する彼等の臣下のへだたりをば、王達自身の目にも、消滅してしまひ、兩者の神に對する無限のへだたりの中に吸ひとられてしまつたかのやうに、消え失せさせた。すなはちキリスト教は彼等兩者を、云はば、ともどもに低下させることによつて平等にしたのである。王侯と臣下とはも早、交互に他に打克つて絶えず國家を暴君政治から放縱へ、さうして無政府状態から專政政治へと移らしめるところの二つの敵對的な力ではない。人民はキリスト教が彼等に感得させる服従心によつて、王侯はキリスト教から得られる節度のため、等しく同一の目的のためにすなはち全體の幸福のために協力する。」¹⁰⁾

主權者と臣下との關係がかくの如くなることによつて、奴隸制度をはじめ、一般に野蠻なる民族に共通の悪しき政治的・社會的現象はなくなつて行つたのである。

かくテュルゴの思想を辿つて來ると、キリスト教が、經濟と結びついた技術とともに、社會進歩の二つの重要な契機として明確に規定せられてゐることを承認しなくてはならない。しからば上記の二つの契機はいかなる關係に於いて社會の進歩を促すのであらうか。それは交互關係的のである。キリスト教は「人類の權利」を照らし出すから人類に自由を與へる。自由によつて人間は「商業精神」を獲得して民族の内部および外部に於いて通商を盛にし經濟の自然性が確立せられ、また新しい技術を生み、キリスト教の普及を容易ならしめ、野蠻人達の間に正しい政治組織の恩恵に浴させる。だから既にのべたやうに、ヨーロッパ人の植民地への經濟的發展は、原住民に對する殘虐なる搾取にも拘らず、原住民は文明開化の恩澤に浴することができ、「キリスト教の限界が溫良なる政府と公共福祉の限界であるやうに思はれる」のである。すなはち經濟と結びついた技術が一方的にキリスト教の教へを創造して社會の進歩を呼ぶものでもなければ、またキリスト教が經濟を一方的に規定するものでもなく、宗教と經濟とが相互に關係しつゝ、互の進歩と普及とに貢獻するのであると認識されてゐるのである。宗教

と經濟——ここに社會の進歩の祕鍵がある。歴史の原動力としてのこの二つの契機は、經濟學者によつてもたとへばマーシャルによつて指摘されてゐることは周知のことに屬するけれど、テュルゴは既に之を看破してゐたのである。我々は今日宗教の社會に對する大いなる役割をば見落しがちである。けれども政治的權威についての上引のテュルゴの短文に於いても示されてゐるやうに、政治組織に與へる宗教的意識の影響は深く省みられねばならないであらう。政治的に結合する民族を眞に國家的な統一に屬すものは單にその民族に内在的な生理的な共通性や地域の同一性や成員が相互に取結ぶ經濟的な共同性などのみに據るのではなく、同時に、その發生は民族に内在的なものに求められるにせよ、其意義から云へばその民族に超越的なあるものによつて、その本來の字義の如くに、結びつかない限りは、内に國家的な存立を確保することもできなければ、外に世界に於いて獨立の意義を有つと云ふこともできないであらう。その限りに於いて、テュルゴが把へた社會進歩のこの宗教的契機は、現在深く認識されるところがなくてはならない。

三

社會進歩の二つの原動力に關して知るところがあつた私は、次に、かやうにして進歩してきたつた最も文明開化の社會をばテュルゴが何處に見たか、と云ふ點に注意を向けよう。すべて思想は時代の問題を説くと云へようが、テュルゴが進歩思想を論ずるに際して持つた問題は、この點を顧ることによつて明白となると思はれるからである。この點に關する彼の解答を予め云へば最も進歩した社會はヨーロッパであることは勿論、實にルキ王朝のアンシアン・レヂームの治下にあるフランスの社會なのである。既に人間精神の進歩に關して論ぜられた場合には極明かになつたやうに、經濟と宗教との原動力によつて順調な進歩を辿つて來た人間精神はただヨーロッパ

に於いてのみありえたのであり、ヨーロッパ以外ではたとへばアメリカでは狩獵時代や遊牧時代の蠻風にとゞまり、或は土耳其に於けるやうに衰頹に陥り、或ひは支那に於いて見られるやうに固定してしまつてゐる。精神と同様に環境すなはち社會組織についても我々は同様の現象を見出さねばならないのである。アメリカの蠻風については論ずる必要はないであらう。土耳其に於けるモハメット教の軍事的熱狂性と破壊性とは悪しき專制政治——鬱蒼たる枝をひろげて大地を覆ひ大地の産物を窒息させる大樹にも似た「徹底的專制主義」(Despotisme de tête)を生ぜしめ社會を自己體が衰頹してゐる。奴隸制度、一夫多妻制度などは社會の放逸状態を物語る象徴であるに他ならない。支那に於いても、先にそこでの精神すなはち「束縛された精神」について論じたときに云つたやうに、專制政治はそれ自體凡庸 (La mediocrité) の内に固定して社會の進歩をはばんでゐる。その一例として支那に於ける科擧の制度についてテュルゴが行ふ批判をつきに引用して見よう。

「束縛された精神が科學に對して行ふ注意は、科學を束縛することにしか役立ちえない。さうして之が殆どすべての東洋の諸國家に於いて起つてゐる事實である。

彼等は彼等の國家の中で科學を保護するために働いてゐるに他ならないと信じてゐる。さうしてこれは屢々誤謬を永久に續けさせることなのだ。支那の政府が任官に際して行ふ文官試験と云ふものは必ずや政府の心を試験せられる科目の内に局限する。了解はせられるが發明は行はれない。敢へて天才に前途を指定するがためには、天才の行手をよく知ることが必要である。さうしてこのことは、普通には發見されてゐる事だけしか見ず今後發見するべき事柄をば見ないのであるから、恒に不可能なことである。それと同じく、東洋の諸王國に於いて科學に與へられた保護と云ふものは科學を傷けたもの、科學をドグマに換へることによつてその進歩を妨げたところのものである」^{1) 2)}

科學に對するかかる支那社會の態度は政治や文化一般についても云ふことができる。凡てがそこでは固定してゐるのである。かかる東洋の社會に於いて共通に見られる進歩の缺如態は、專制政治に對する革命が起つたとし

1) cit. op. p. 292.
2) cit. op. p. 131.

ても、それは常に新しいがしかし同じく專制的な君主の登場を見るばかりであつて、歴史は進歩ではなく、單なる反復であり循環であるにすぎない。

かやうに東洋社會と西歐社會とが對比的に論ぜられる時、テュルゴに於いては、一つの理論が根柢に横はつてゐることが見出される。それは地理的環境の影響に歸せらるべきものであつて、小國に於いては社會に自由や正義すなはち進歩を齎す一切の條件が発生するけれども、大國に於いてはさうではないと云ふ類型學的思想である。テュルゴはこの思想を事實に基いて論證する。彼の歴史觀に於ける空間性への願慮について深く立入ることは今の我々の問題には屬しないけれど、この點についてのみしばらく彼の主張に耳を藉すことが必要であるであらう。

「小さい國民に於いては、國家全體が各個人に見える。各個人が直接に社會の利益にあづかり、他人のために社會を抑壓することに非常に大きな利益を見いだすことはできない。瀆職者を備ふために勝手に用ひられる十分な富は存在しない。下層民はなく一種の平等が支配する。王達は彼等の臣下から離れては生活できない。人民は必ずや王達の唯一の親衛隊であり、唯一の侍臣である。」

すなはち小國では統治者は人民の權利や自由を無視しては政治を行ふことはできない。もしさうすれば立ちどころに人民の反抗に會ひ自らの地位を危険にするからである。

之に反して大國に於いては、人口が餘りに多いから、王と人民との間が離れざるをえない。そこでその間隙に瀆職を事とする官吏や人民とは全然無關係な宮廷が生じ、王と人民とを更に隔離して、人民の權利を毫も顧みざる悪しき專制的權力を生ぜしめるのである。この思想は一應うなづかれてよいであらう。併しながらヨーロッパに於いてもローマ帝國の如き大帝國が事實存在したではないか、そこでは東洋と同じ專制政治が行はれたと考へ

てよいのか、と云ふ疑問を、我々は期待することができるところでこの疑問は事實と合はない、とテュルゴは云ふ。何故さうなのか。第一には、前に述べたやうなキリスト教の影響によつて。第二には、ギリシヤから初まるヨーロッパ社會すなはち所謂ローマ風ゲルマン風諸民族の社會の成立の由來によつて。——この第二の事情の説明は既述のテュルゴの社會進歩の理論の實證的證明となり、また彼の開明的專制政治に對する絶對的支持論のうかがふにも足りるものであるから、若干立ち入つて論じなければならぬ。

ヨーロッパ社會の由來は古代ギリシヤに遡らねばならぬ。そこでは大帝國が成立することは不可能であつた。多島海を中心に榮えたその地方では「商業精神」がみなぎり都市國家が形成せられ、ギリシヤは小さな多くの都市國家よりなつてゐた。彼等は文明人 (Civile) として四圍の野蠻人に對してゐた。文明は野心や情熱に拍車をかけて野蠻人を征服し、文明國は互に戰鬪し、また都市國家内部に於いても勿論革命をひき起した。併しながら、注目すべきことに、それらは人々の自由や理性を抑壓しないばかりか却つてますます人々に自由を與へ理性に目覺めさせ、その結果技術や法は漸次改善されて行くことに貢獻したのであつた。こゝに東洋に見られるが如き大國に於けるとは全く違つた事實が見られるのである。我々は先に、一つの例として、東洋では科學に加へられる保護が却つて科學を墮落させる所以のものを、テュルゴを引用して、語つておいた。ところでギリシヤでは科學は環境からどのやうな影響を蒙つたであらうか。

「ギリシヤが東洋人から學んだ科學に於いて東洋人より非常に先んじたのは、ギリシヤが唯一一つの專制的權威に服しなかつただけのためである。もしもギリシヤがエジプトのやうに唯一一つの國家をしか形成しなかつたとしたら、恐らくは、ルクルゲスやソロンのやうな人でも、科學を奨励しようと思つたが、科學の研究をば周到な取締で以つて規制しようと思つたであらう。初期の哲學者には至極尤もな黨派精神 (Esprit de secte) が國民精神になつたであらう。もし立法者がピタゴラスの門弟で

あつたとしたら、ギリシヤの學問は信仰箇條に於いて樹立せられる此哲學者のドグマの知識に、いつまでも、制限せられたことであらう。支那に於いて、有名な孔子が受けたのと同じ状態であつたであらう。幸ひなことに、ギリシヤが無数の小さな共和國に分裂してゐたと云ふ事情が、天才に對して、彼に必要でありそして許容して寧もおそるるに足らぬ一切の自由を、ゆるしたのである。⁴⁾

ギリシヤに於いて見られたこの社會環境の風習は以後ヨーロッパ社會の傳統として永續した。さうして、ローマに於いてキリスト教が採用せられてこの方、人間の情熱は宗教と云ふ「唯一つの制動機」を與へられ、理性に耳傾ける「溫和なる情熱」となつたために、ヨーロッパ社會のこの傳統は更に飛躍的に發展して行つた。なる程ローマでは文明人と野蠻人との間に征服・侵入の絶えざる軌轍があり、その結果ローマ帝國は遂に衰亡した。けれども、第一に、その衰亡の原因は政治組織そのものにあつたのではなくして、統治者にその人を得なかつたがためであり、第二に、ローマ人と野蠻人と接觸は、後者の勝利を以つて終つた場合ですらも、恒に上のヨーロッパ社會の傳統は採用・保持せられ、兩つの民族は融合されたのである。ローマ以後のヨーロッパが「いたましい光景」を呈した時も、封建諸侯はその傳統を受けついで行つた。さうしてさらに十字軍によつてヨーロッパ人は「統一的意識」を獲得し、ヨーロッパ全體が「巨大なる共和國」と感得せられるに至つたのである。⁵⁾ 文藝復興は、疑ひもなく、古代ギリシヤに於けるとよく似た事情に負うてゐる。⁶⁾ それ以來の各方面の發明は只管社會の進歩に貢獻するものであつた。さうして大發見によつて「世界は遂に知られた」のである。かくしてテュルゴは近世ヨーロッパに次の如き讚辭を呈してゐる。

「時は來た。ヨーロッパよ、お前をつつんだ闇から出よ！メヂチ家の人々、レオ十世、フランソア一世の不朽の名よ、永久に祀聖されてあれ！技藝の恩人達は技藝を修行する人々の榮光にいかにあづかつてゐることであらう。およイタリヤよ！再び文藝と

4) cit. op. pp. 131, 132.
 5) cit. op. pp. 220-232.
 6) cit. op. p. 132.
 7) cit. op. p. 232.

趣味との祖國たり我々の地域を豊穰にするために流れ出た水の源よ！私は君に敬意を表す。我がフランスはまだ遠くより君の進歩を視てゐるにすぎない。……藝術の華咲く枝がヨーロッパのすべての國々を飾る日が来るであらう、さうしてその日は遠いことではないのである。⁸⁾

このやうな「環境の偶然」がヨーロッパに於いてのみ進歩を可能ならしめたのである。テュルゴはかく考へて、近世初期のイタリヤを通じて遙かにローマ帝國の再建をヨーロッパ社會の前途に見たのみならず、更にルキ王朝のアンシアン・レヂームがこの目標に向つて進みつゝあると思ひ、祖國の政治に心からなる信頼を捧げてゐた。彼によればフランスのアンシアン・レヂームは東洋の專制政治ではない。それはたしかに大國ではあるが、そこにあるのは東洋的專制政治ではなく「模範的な政府」(The Government models)である。何故なら「模範的な政府」のためには「國家のあらゆる部分の内に變はらぬ秩序」があり「各地方・各都市の地位が定め」られ「それらに對しては中央政府とともに濫用できぬ一切の自由をゆるす」ことが必要であり、「一般に最も模範的な大國とは、多くの小さな國々の聯合から形成せられた——特にその聯合がゆるやかに行はれたときの——大國である」¹⁰⁾のであるけれども、フランスこそその條件に該當する大國でなければならぬからである。

四

以上に於いてテュルゴの社會進歩の理論の大意がぼゞ了解せられたであらう。最後にわたくしは注目すべき若干の點に就いて考察を附け加へておきたい。

社會の進歩が經濟と宗教との二つの生活部門から發生すると云ふテュルゴの思想について更にその内容の聯關を探究するならば、次のやうになるであらう。先づその二つの生活部門は、それ／＼獨立に他を限定し合つてしかも恒に他を俟つてのみはじめて、眞に社會進歩の契機となりうる。キリスト教によつて眞の人間性の自覺が與

8) cit. op. 233.
9) cit. op. pp. 213, 214.
10) cit. op. 290, 291.

へられ、自由が生じ、天才や發明の才幹は新しい技術を創造する。さうしてそれが同じく自由なる雰圍氣が支配する都市の「商業精神」の下に服して「取引の對象」となり通商が廣範圍に行はれることによつて、進歩は野蠻人の地方に普及し、彼等にキリスト教を傳道し、ヨーロッパ人と等しく眞の人間性の自覺に達することをえしめるのである。この二つの契機が相互に限定せずして社會は進歩するものではない。我々はこの進歩思想から歴史哲學上のやうな事實を學び取ることができた。第二に、この進歩思想が本來ヨーロッパ的なものであることは、既に明かである。この思想は絶えずヨーロッパの社會類型を東洋の社會類型と對比し、後者を前者のもつ諸條件を持たざるものすなはち缺如態として把握するところに成り立つた。こゝに於いても近世思想に於けるヨーロッパ的なものが鋭く認識されなくてはならないであらう。しかし同時にこのヨーロッパの起源を有つにも拘らず、進歩思想は同時に十八世紀の歴史哲學的思想として世界史性を擔つてゐたと云ふことも確認されなければならぬ。テュルゴは社會進歩の事實を東洋と比較されたるヨーロッパに於いて實證するとは云へ、東洋の社會が永久に衰頹あるひは固定の状態にとゞまることを云ふのではない。「私は世界の或部分に文明開化の人々を、さうして他の部分には森の中を彷徨ひ歩く人々を見る。限りなき期間が経てば、進歩のこの不平等は消えてゆかねばならないであらう。」すなはち進歩の理念は本來人類一般に妥當すべき世界史的指導理念なのである。第三に、我々はテュルゴの進歩思想に於ける類型學的なるものに注目しなければならぬ。彼は個々の民族社會をではなく、ヨーロッパ的社會・支那的社會・土耳其的社會の類型を認識しようとしたのであつた。この點に於いて彼の歴史哲學が十九世紀の歴史主義と異なる、と正當に主張せられうるのである。しかし、わたくしはこの點に關する詳論をこゝでは行はない。第四に、進歩の一つの契機である經濟生活の把へられ方について云ふならば、經濟が「商

業精神」としてすなはち流通部門に於いて考察されるにとゞまつて、技術が生産部面との結びつきに於いて考察されてをらなかつた點を注意せねばならぬ。また同様に經濟が宗教と內的に緊密な關係を持つてゐるのでもなかつた。こゝにテュルゴの思想と本來民主主義的な新教の經濟倫理との重大なる相違を見いださなくてはならぬ。ソルボンヌにゐた時の若きテュルゴは經濟をばまだ外部から眺め經濟生活をその固有の全機構から認識するに至らない重商主義の思想をまだ脱してゐなかつた。すなはち資本主義の精神を未だ主體的に把へてゐなかつたのである。人口に膾炙してゐる彼の植民地論すなはち「植民地は充分な營養を受けとつてしまふまでは木にくつついてゐる果實のやうなものだ。營養を十分とると木から離れ、自身で芽を出し新しい木をつくる。カルタゴはかつてのテーベがしたことをしたし、またいつかアメリカもさうするであらう。」と云ふ思想は古典的な植民地觀を脱しきれぬ重商主義的な思想の表明に他ならない。上述の專制政治の支持論とともに、彼のこの保守的な立場は彼がアンシアン・レヂームの代辨者であつたことを證明する。「ルキ十四世の御世には何人も一言も申上げぬ。ルキ十五世の御世にはひそ／＼と語合ひ、陛下の御世には聲高々と語合ふ」と云ふルキ十六世時代の人マレジャルド・リシュニエーの言葉は、當時の時勢の變遷を暗示するものとして、有名であるが、テュルゴはまだこの時はひそ／＼話をすらすら爲さなかつたのである。彼が後年神學院を出でて行政官として英鋒を顯すに及び、この思想がいかに變つたかあるひは變らなかつたかと云ふことは、改めて論ずるであらう。またこの時期に限つても、彼の歴史哲學に關して論すべき點も尙多いのである。けれども彼の歴史哲學に對する全面的檢討を行ひ、以つて十八世紀の歴史的意識を探ねるよすがとすることも別の機會にゆづり、今は、彼の當時の歴史觀の指導的理念たる「進歩の理念」の内容を尋ね得たことを以て満足しなければならぬ。

2) cit. op. p. 141.

3) 中村善太郎「佛蘭西革命前後」一四二頁。